
憧れのヒーロー

東野佳奈子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

憧れのヒーロー

【Nコード】

N2152BA

【作者名】

東野佳奈子

【あらすじ】

刑事見習いの俺 佐久間貴彦は突然誘拐事件に出くわし、その人質が自分の娘だと知る。自分の娘を助けるためなら金など惜しくない、今すぐ助けにいく、時間さえ待つてくれれば 父親の名誉を賭けたパパ刑事見習いと、誰にも明かせぬ過去を持った犯人との一刻を争う闘いを描いた作品。

第一章 正午までに

それは俺がまだ交番で巡査として働いていた頃の事件だ。まさか自分が駐在している交番に、誘拐犯から電話がかかってくるとは思わなかった。

あれはいつだったか。秋の入り江といった頃だったかもしれない。珍しく残暑が長引かなかった年だ。俺はいつもと同じように事務机に肘をついて、交番の固定電話が鳴るのを待っていた。事件がおきてほしいわけでもなかったのだが。午前中の俺のパトロールは行ってきた。外を歩く子供達は楽しそうにおしゃべりをしながら、身振り手振りして何かを熱く語っている。

するとそこにひとりの少女が熊のぬいぐるみを抱えて、駐在所に入ってきた。そして、ずっと俺のことを見つめている。

「お嬢ちゃん、どうしたんだい。お母さんはどこにいるのかな」
俺は心配になって訊いてみた。その少女は俺の一人娘に瓜二つだった。思わず「由香里なのか」と訊きそうになったが、まさか自分の娘がこんなお洒落なドレスを着て、熊のぬいぐるみを持ってふらついているわけがない。少なくとも、そういう教育はしていない。

「由香里ちゃんのパパ？ 英利、知ってるよ、由香里ちゃんのこと」
娘の知り合いにこんなお嬢様がいるのかと、少し驚いた。僕は椅子から立ち上がって腰を屈め、少女の目線に自分のそれを合わせた。
「由香里のお友達かな。エリちゃんっていうのかな。だけどな、英利ちゃん、お母さんがいないじゃないか。こんなところに独りでいちゃあ、危ないよ。とりあえずここに座って」

「英利にママ、いないよ。それよりね、由香里ちゃんがさっきね、どっか行っちゃったの。知らない人が連れてっちゃった」

聞き捨てならなかった。母親がいない、というのも気になったが、知らない人が連れて行ったというの方が気になった。知らない人が連れて行った。即ち誘拐されたということか。咄嗟に考えた

が、とにかく頭の中が混乱していて考えがまとまらなかった。

「ちよつと、詳しく聞かせてもらえるかな。憶えてる限りでいいんだけどね、その人たちが着ていたお洋服とか、顔とかを教えてくれないかな。あれ、つてことは、由香里と一緒に遊んでいたということかい？」

「そうだよ。お洋服はね、白いの着てた。おまわりさんがその下に着てるみたいなの。おズボンはおまわりさんが穿いてるのの黒いやつかなあ」

ワイシャツにスラックスという出で立ちなのだろう。俺は混乱している頭の中を必死に整理して、英利の言うことをメモした。性別はどちらなのだろうか。この様子だと男か。そのように戸惑う俺の気持ちを汲んだように、英利は言った。「男の人だったよ」

「あのね、大きくて黒い眼鏡かけてた。身体もすごく大きかった」「どこで攫われたんだい？ 君も一緒に遊んでいたところだよね」

僕が英利の小さな肩に手を置いたときだ。俺よりも先輩巡査の小内が巡視から帰って来た。

「お、佐久間、そのお嬢さんはどこの子供だ？」

「小内さん、俺の娘が誘拐されたかもしれない。この子が今知らせに来てくれたんです。どうしよう……」

警察官のくせに、弱々しい一面を見せてしまった。とにもかくにも、英利の証言をメモした紙を見せて、犯人の特徴を言った。それを小内が読んでいる間に固定電話が鳴った。番号は表示されておらず、『公衆電話』とだけ示されていた。俺は頬を冷や汗が伝うのを感じた。

「……もしもし、港町交番ですが」

「佐久間貴彦だな？ 貴様の娘はこちらで預かった。詳しくはファクスで確認せよ。以上だ」

「おいつ、ちよつと待てっ」

俺がそう叫んだときにはもう電話は切れていた。ファクスとは言われたが、まだ届いていない。俺の額は汗でぬれていた。全身の力

が抜けるのがわかった。呆然と受話器を持ったまま机に手をついていた。すると、小内が声をかけてきた。

「ファクスが届いたけど、今の、犯人か」

俺はファクス用紙をひったくるようにして小内から取り上げると、それを読んだ。

「あつ、すみません、ちよつとみせてください。今のが犯人だと思います。これって今送られてきたものですか」

小内は頷くと、俺から目を逸らして英利と何か話し始めた。俺はそのファクスを見て目を剥いた。

『佐久間由香里を預かった。彼女を助けたければ、本日正午までに浜町海岸のプレハブのところまで来い。その際身代金として、現金三百万円を持つてくることを条件とする。その入れ物はシルバーのアタッシューケースに特定する。この事件を外部に漏らすことを許さない。唯一漏らしても良いのは、本日港町交番に駐在している小内健太巡査のみだ。警察、知り合い、身内などに漏らしたらどうなるかは容易に想像がつくだろう。漏らしたら彼女の命はない。では、本日正午にプレハブの裏で取引を行う。頼んだ』

「何を考えてやがる、こいつ」

俺は思わず呟いた。馬鹿馬鹿しい真似をして、本来の目的は金なのか。そして、俺のその表情を見て小内は俺に訊いてきた。

「どうすんだ」

「行くしかないでしょう。でも、現金三百万つて俺の手元にはないですし、銀行まで行って下ろさないとないですし、どうしよう……」

「由香里ちゃんのパパ、お願い、由香里ちゃんを助けて。おまわりさんでしょうか？ お金が必要なの？ それならパパに電話するよ。すぐ用意できるよ」

やはり金持ちの家庭だったのか、と僕は改めて感じた。だが、殆ど無関係の子供を誘拐事件に巻き込むわけにはいかない。

「これはね、おまわりさんの娘のことだから、英利ちゃんはいいいんだ。君を巻き込むわけにはいかないんだよ。これもおまわりさんの

お仕事なんだ」

そうは言ったものの、正午まであと一時間もない。銀行で金を下ろさなければ手元にはないし、それにもまた時間がかかる。俺は迷った末に小内に協力を頼んだ。

「小内さん、俺が金を下ろして向こうに着くまでの間、もし犯人から何かあったらこちらで受け答えしてもらってもいいですか。それと、英利ちゃんをお願いします。今すぐ行って来ます。お願いします」

「任せておけ。絶対引き下がっちゃだめだぞ。少し脅されたからって、おまえは警官だ。そんなんでビビっていたらちゃんとした刑事にはなれない。それに娘さんの命も懸かっているんだ。しっかりな」
「ありがとうございます、わかりました。行って来ます」

俺はポケットに携帯電話を入れて、キーを車に差し込んだ。

第二章 『無事』

俺は駐在所を飛び出した方がいいが、そのあとどうなるかまでは考えていなかった。銀行まではまだ少しある。思い切り渋滞に嵌った俺の車は、五分経つても動いたつて三センチだ。今娘はどうなっているのだろうか。何をされている？ 飯は食ったのか？ 腹は減っていないか？ 痛いことされてないか？ 車が動かなければ動かないほど、不安は募っていった。俺は腕時計に視線を落とした。もう既に十一時二三分だ。車、動いてくれないか、頼む。それしか今は願えない。

大丈夫だ、あいつは強い。俺は自分に言い聞かせた。必ず元気で帰ってくる、大丈夫だ。もはや自分を救う言葉はこれしかなかった。

少し先に銀行が見えた。俺は傍らに車を停めて銀行まで走ることを決意した。そのほうが早い。いつまでも車内で涼んではいられないのだ。昔から憧れていたヒーローは、こういうときに頭を使うのだ。全速力で走って、銀行へ入った。

思いのほか、銀行内は空いており、金を下ろすことは容易にできた。だが三百万というと、手続きをせねばならない大金だ。面倒だったがその手続きを済ませ、再び車に乗り込んだ。今までにこれほどの大金を手にしたことがなかったので、少し緊張してもいた。

車に乗ったままではよかった。今の時刻は十一時三二分だ。あと三十分をきった。すると、携帯電話が着信を告げた。小内からかもしれないと思い、渋滞中で全く動かない車内で携帯電話を開いた。

「もしもし、どうか……」

「今どこにいる？ あと三十分をきったが、まだこちらに到着していないようだな」

俺は顔をしかめた。先ほど駐在所で聞いた声と同じだった。

「おまえ、さっきの誘拐犯か。人質は俺の娘だと言ったな。身代金

はちゃんと用意した。頼む、解放してくれないか」

「無駄だな。解放することはできない。こちらの指示に従ってもらう。今から佐久間由香里の声を聞かせる。一分間だけ時間をやるから、言いたいことを言っておけ。万が一に備えてだ」

「万が一って、俺がそっちに行つて、金を渡したら解放してくれるんじゃないのか」

「俺がそこまで優男だと思うか。それだけで娘を返すことはない。とにかく言うことをきけ」

そして俺が黙っていると、娘の声が聞こえた。

「パパ、パパっ」

「由香里っ？ おまえ、怪我してないか？ 飯は食ったか？」

我ながらこの貴重な時間に何をくだらないことを聞いている、と思つたが、それが一番心配していたことだつた。

「うん。由香里、英利ちゃんと遊んでたらね、知らないおじちゃん
が由香里のこと連れてつちやったの。でもね、由香里元気だよ。お
じちゃん悪いことしてないよ。由香里とも遊んでくれたよ。だから、
心配しないで」

俺は泣きそうになつた。これは犯人に言わされていることなのか
もしれないが、それでも声を震わせずにちゃんと喋っている。こん
なにこいつは強かつたのか、と俺は娘の成長もろくに感じてやれな
かつたことに腹が立つた。

「そうか。パパ、助けに行くからな。頑張れよ、おまえは強いから
な。これぐらいのことじゃ、くじけないだろ？ 頑張れ、俺が、パ
パが助けに行くから、それまで頑張るんだぞ」

「うん、由香里、知ってたよ、パパが来てくれるって。おじちゃん
がパパに電話してたもん。大丈夫だよ、パパはおまわりさんでしょ
う？ かつこいいところみせてね。あつ」

電話が取り上げられたのだと、すぐにわかつた。ストラップが携
帯電話本体に当たる音がしたからだ。

「一分だ。最後の声になるかは、貴様次第だ。あと三十分をきつた

ことを報告するとともに、娘の声をきかせた。これでこちらとしてはもうすることはない。あとは貴様を待つだけだ」

「おいっ、ちょっと、俺からも聞きたいことがある。なぜ俺の携帯電話の番号が分かった？」

「貴様の知り合いだからだ。それでは失礼する」

「まだっ……」

まだ聞きたいことは山のようにあったが、仕方がない。携帯を閉じて、前を向き直った。

浜町海岸に到着したのは正午四分前だった。プレハブを探して歩き回っていると、岬のあるほうにいくつか古びたプレハブが建っていた。どれももう使われていないらしく、潮風にあたって錆びていた。

そこまで行くと、携帯電話が鳴った。公衆電話からだ。またか、と呟くと携帯をあけた。

「三つ目のプレハブまで歩け。正午前にここに来たことを認める。よって、佐久間由香里の命を奪うことはやめよう。だが、彼女とともに、俺もここにいないわけではない。即ち、金を三番目のプレハブの裏に置いたらその場を即座に立ち退けということだ。あまり探し回っているような行為が見受けられた場合、こちらでそれ相応の対応をすることになる。頼むぞ。こちらもそれは本意ではない。ではまたどこかで会おう」

シルバーのアタッシューケースを片手に、安堵のため息をついた。ひとまず命の危険は免れた。三つ目のプレハブを数えながら歩くとそれは一番古びたものだった。俺はアタッシューケースをプレハブの裏に置くと、周りを見回しながら車のあるほうへ向かっていった。しかし、すぐに呼び止められた。

「あれ、佐久間じゃん。どうした、こんなところにこんな物置いて」「あつ、触るなっ。触っちゃ駄目だ……。絶対に触るなよ」

声をかけてきたのは、警察学校で同期だった塩原だ。少し前まで

は俺と同じような制服を着ていたのに、今はもう背広姿だ。きつちりと着こなされた背広は、よく似合っている。そして、俺は恐る恐る訊いた。

「……なんでおまえ、ここにいるんだ」

「なんでって、この警察署に配属されたからだよ。すぐそこにあるだろ、浜町署。つーか、おまえこそ何こそこやってんだ。最近この海岸で不審者が出没すると聞いて、俺らもここらへん張り込んでるんだが、まさかおまえか？」

「そんなわけねえだろ、まさか。俺はあれだよ、ちょっと用事があるって、ここにきただけだ」

完全に怪しかった。だが、外部に漏らすわけにはいかない。現に先ほどの犯人はこの近隣で見張っているに違いない。それでなければ、俺がここに来たことを確認することは不可能だ。それか、複数犯の可能性もある。一人が近辺で見張り、もう一方は監禁された少女の見張り役だ。その可能性も無きにも非ずだ。

「そのアタツシケースは？」

「なんでもねえって、言ってるだろっ。しつこいぜ、おまえ」

「ふうん、まあいいや。じゃ、駐在任務お疲れ様ですっ。頑張ってください」

ふざけて塩原は敬礼してみせた。制服を着ているからといって、敬礼をされることでもない。そして彼は自前のバイクに乗ってどこかへ行った。ひとまず俺は安心すると、車に乗った。疲れが一気に出た気がした。すると、携帯がまたしても鳴った。

「おいっ、おまえどこにいるんだっ」

「何だおまえ、先輩巡査に向かっておまえとはいいい度胸だな。それはそうと、どうだった？ 間に合ったか」

俺は心臓が止まりそうになった。ちゃんと着信のモニタを見なければ、と自分自身に言った。

「なんとか、終わりました。無事に」

「そうか。英利ちゃんも大丈夫だが、この子の親はどこだろうな」

「訊いても答えてくれないんですよ。とりあえずそこで預かっていてください。俺もすぐ帰ります」

そして携帯をきると、再び電話がかかってきた。今度はちゃんとモニタを見た。公衆電話からだった。

「もしもし」

「確かに金は受け取った。ご苦労だった。またこちらから指示する」
再び電話は切れる。今、この船場を何か車らしいものは通ったか？ 通ったはずがない。今自分は外に目を向けていたから、それは確かだ。不信感を抱きながらも、浜町海岸を去った。

第三章 ヒーロー

駐在所に到着したときはへとへとに疲れていた。俺ってこんなに体力なかったか、と思うほど疲れていた。金は払ったが、娘は帰ってこない。それどころか、警視庁や各県警に通報できないだけあって、GPSで捜すことすらできない。これが特に条件付でなかったら、今頃はもう犯人逮捕に至っているはずだ。いつもの段取りを踏んでやれば、これほど梃子搦らないのだ。娘は死の瀬戸際を歩かされていたにも関わらず、あのように明るく振舞い、俺を何とか安心させようとしていた。俺は何と無力な人間なのだろう。警察官になれば、必ず人を救える、ヒーロー的存在になれると勘違いしていた自分が馬鹿馬鹿しい。

「おつ、お帰り。由香里ちゃんは？」

「……受け渡してもらえませんでした」

「はあ？ どういうことだよ。金だって、ちゃんと取引が正当に行われたわけだろう？」

「もう、どうしよう、小内さん……。俺、もう無理かもしれなくて。こんな時も娘は、明るく電話で話してくれたのに、親がこんなじゃ、こんなじゃ、どうしようもないです……。俺は父親失格です。無事に娘を救い出せるか、自信がなくなってきたんです。どうしよう……」

「おまえ、どうしようどうしようって言ったって、由香里ちゃんが帰ってくるわけじゃないんだぞ。父親どころか、警察官だって失格だぞ、おまえ。ヒーローになるんじゃないのかよ、警察官になつて。おい、おまえどうした、あのときの希望は。刑事になって、世の中の凶悪犯罪に立ち向かうヒーローになるんじゃない、なかったのかよ」

俺ははっとなった。説教されたせいもあるが、それ以上に何かを気づかされた。そうだ、昔の俺はこんなにしょぼくしていなかった。

ヒーローになつてやる、何か名誉ある称号を掴んでやると、必死だったではないか。それが数年経つた今はなんだ。娘が事件に巻き込まれて、うまく救い出せる自信がないだなんて、ヒーローはそんな弱音をはかない。

「ねえ、由香里ちゃんのパパ、泣いてるよ？ どうしたの？」

「英利ちゃん、ちょっとそつととしておいてやろう。いずれ、自分が何をしなくちゃいけないのか気づくから」

「自分がしなくちゃいけないことって、なあに？」

「由香里ちゃんパパは、今由香里ちゃんを救つてやらなくちゃならんだろう。だけど、救う前に弱音を吐いちゃあ大切な人は救えない。彼は今、由香里ちゃんを救うことをしなくちゃならんのだ」

「じゃあ、英利は由香里ちゃんがちゃんと帰つてくれるように願つてればいいの？」

「よく分かつたじゃないか。そうだ、君はそれを願うしか方法は無い」

俺はその会話を聞きながら、子供よりも弱い自分を恥じた。こんなに大人が弱くてどうするんだ。子供の模範がヒーローじゃないか。立ち直らなければならぬ。くよくよしたって、娘が歩いて帰ってくるわけじゃない。

「ありがとうございます。俺、ちょっとあのときの感覚取り戻しました。そうですね、ヒーローはこんなじゃあないですよ。よし、頑張るぞ」

膝を叩いて俺は立ち上がった。娘を助けるために何ができるか。まずは犯人の形態から考えよう。複数犯か、単独犯か。おそらく複数犯だろう。そうでもなければ成し遂げられない。できたら神と崇めてもいいだろう。見張っていないければ、由香里は何をしでかすか分からない。ある意味で爆弾少女だ。鉢植えを割る？ 犯人の腕を噛む？ そんな生暖かいもんじゃあない。それこそ監禁された場所から脱走するだろう。

「つまり、この事件は単独犯ではなく、複数犯によるものだと思う

れます。ですから俺が浜町海岸に行ったときに電話がかかってきて、俺に指示を出せたわけですし、金の受け渡しも正当なものに終わってたんだと思います。あの周りには特に大きな建物はありません。オペラスコープでも覗かない限り、俺の姿は米粒程度でしょう。一人は由香里を監禁した場所で彼女を見張っている。そしてもう一人は金を受け取る、いわば一番犯人扱いされやすい人物です。そして、指示を出す奴が一人。合計少なくとも三人はいるはずですよ。その三人の連携プレーで今回の取引が成立したんでしょう」

「犯人はどういう奴だと思う？」

「電話で聞いた話だと、俺の知り合いが少なくとも一人いるわけです。で、指示を出している奴が一番可能性が高いです。俺の知り合いだから携帯電話の番号がわかったのだと言っていました。そうです、車のなかで俺の携帯に電話がかかってきたんです」

「ほう。心当たりは？」

「それが、殆どないんです。俺の出身高校はそれほど頭のいい高校ではありませんでしたし、そこで仲間になったやつも、殆どが不良です。でも田舎のチンピラといったところでしたから、都会に来てまでこんな古臭い真似はしなはずですよ。でも思い込みは厳禁、ということですので、保留にしておきます」

「何か恨みをもっていそうなやつとかは？」

「いいんです。だから犯人像がつかみにくい」

俺は必死に考えたが、どうも思いつかない。というよりも、高校時代は不良にいじめられてばかりだったので、あまりいい思いではない。がり勉強だとか、真面目な子ぶっていると言われ続けた。だから、高校の仲間にあうのは正直いやだった。しかしそんなときに限ってやってくるのがあいつらの変なところだ。

「よお、佐久間。まだおまわりやってんのか」

「あ、高澤君じゃないか……。今日はどうしたんだい」

声は震えていたが、一生懸命に話した。怖かった。相変わらず田舎のチンピラやってんのか、と言ってやりたかったが、そんなこと

をしたたら殴り殺されるに違いない。口が裂けてもいえないのだ。

「いやあ、おまえがここでおまわりやつてるって噂にきいたもんだからさ、本当かと思つてきてみたらなによ、マジでやつてんだ。で、今何してた？ 刑事さんになるために一生懸命推理ごっこでもしてたのか」

「え、うん、そうだよ。何かあつたのかい、事件でも」

「事件なんざねえさ。だけどよ、ちよつとばかり金が足りねえんだ。おまえならくれるよな？」

「貸す、つての忘れてないかい？」

高澤は思い切り舌打ちをすると、俺の制服の襟を掴んでぐいと引き寄せた。また高校時代に戻った気がした。今が一番幸せなはずなのに。娘が誘拐されようと、救い出せばいいだけのことじゃないか。昔に戻つて何も、暴力をされるわけじゃないのだから。

「ごめんっ、ごめん、わかった。いくらあげればいいのかな」

「百万」

「百万？ それ正気で言ってるのかい？ 何に使うんだ、そんな大金」

「いいじゃねえか。稼ぐには時間がかかりすぎる。早くしろ」

「今すぐ引き出せる額じゃないよ、そんなの。だつて、たった今」

そこで小内が俺の口をふさいだ。

「なんでもない。今のは何でもないからな。だが、なんで今すぐ百万もいるんだ。話を聞かなくちやいかんな」

丁度そのとき、固定電話が鳴った。俺は口をふさいでいる手をはがして、受話器をとった。

「もしもし」

「さて、こちらは準備が整った。いまから指示を出す。そこにかたまっているチンピラを追い出せ」

俺は送話口をふさいで高澤を手で追い払った。重要なことを話すから、と言って追い出した。小内が彼の背中を押して外まで送ると、

入り口に固まっていたほかのチンプラが俺のところ押し寄せきて殴って帰ったが、そんなことはどうでもいい。娘が待っている。

「……受話器が落ちたが、無事か」

「ええ、まあ。話を続けてください」

口の中が切れているのか、血の味がしたが、昔から教えられている「舐めれば治る」というのを思い出し、舌で傷口を舐めておいた。それでも血は滝のように出てくるのだが。思いのほか犯人が優しいだったので、少しだけ安心した。娘が言うように、もしかすると本当に優しいのかもしれない。

「口が切れているだろう。音で分かるぞ。何か綿でも詰めておけ。

こちらが気が気じゃない」

「すみません」

いつの間に俺は犯人に対して敬語になっていたのだろう、とふと思った。そして、応急処置用の救急箱から脱脂綿を取り出して、傷口に当てた。そして口をつむぐ。

「今から二時間以内に栗木第一倉庫から第八倉庫の駐車場に來い。

そして、佐久間由香里を捜してみる。いずれかの倉庫に佐久間由香里はいる。二時間以内に現れず、探し出せなかった場合、こちらで用意した爆薬に点火する。その際俺たちは倉庫の外にいる。被害を受けるのは貴様が、貴様の娘のどちらかだ。いいな、今から二時間以内だ。我々の本意でないことはなるべくしたくない。そして命を奪う行為をしたくない。矛盾していると怒っても構わない。だが、そうするしかないのだ。よろしく頼む。以上だ」

そして通話は切れた。俺はあることを確信した。犯人は複数だということだ。俺たち、我々、と複数を暗示する言葉を言っていた。確かに確認した。

「小内さん、これから栗木第一から第八倉庫へ行ってきました。相手は複数犯ですが、やはり今回も命が懸かっています。俺が二時間以内にそこへ行つて、由香里を探し出せばいいということでした。そうでなければ倉庫ごと爆破させるそうです。俺がヒーローになってみ

せませす。必ず犯人を逮捕してみせませす。あ、逮捕はできないですけど、身柄確保ぐらいはしてやります。そうしたら警視庁にも知らせませすから。じゃあ、行ってきます」

俺は浜町海岸から帰って来たときよりも遥かに元気だった。自分で実感するほどだ。車に乗って、栗木倉庫地帯まで急いだ。アクセルペダルをゆっくりと踏んだ。

第四章 目的

それから俺は、栗木第一倉庫前に無事に到着することができた。だが港町交番からここまででは相当な距離があるので、時間はかかった。今の時刻は午後一時三五分だ。向こうを出発したのが十二時四五分だったので、一時間弱はかかってここまで来たということだ。犯人はそれを計算した上で二時間というタイムリミットを設けたのだろうか。どちらにせよ、戸惑っている時間はない。一刻を争うのだ。

俺は第一倉庫のシャッターの前に立った。こじ開けるには重たすぎる。だがしかし、それ以外にどのような手段があるというのか。とりあえず力ずくであけようと試みていると、背後から声をかけられた。

「おいおいちょっと、警察官だよ、君」

「そうですね、何か用事ですか」

「こじ開けちゃいかなだろう。ちゃんと鍵があるんだよ。重たいとか、一人じゃ無理だとか、そういうことじゃなくて、鍵があるからそれで開けないと開かないに決まっているじゃないか。それはそうと、警察官がこんなところで何をしているんだい」

漁師だろうか。それとも近くの住民か、この倉庫の管理者か。まあどちらでもいい。今はそれどころではないということの説明しなければならぬ。俺が説明しようとする、携帯電話が鳴った。公衆電話からだ。犯人がかけているのだろう。

「そこにいる爺さんを追い払え。ここは貴様以外が来るべきところではない。今すぐに帰させろ。さもないとこちらが報復行動に出る。尚、爺さんにこちらの情報を渡すことも許さない。その場合も行動に出る」

どこで監視しているかはわからないが、報復行動というのはおそらく、この爺さんに何か危害を加える、または倉庫を爆破させると

いうものだろう。どちらも犯人の思う壺にするわけにはいかない。被害者を出すなら俺一人で充分だ。いや、できれば被害者なんか出したくない。

「報復行動つてのは、爺さんをどうするとかという話か」

「それを教えるわけにはいかない。貴様もそれほど頭は悪くないはずだ。どうなるのかぐらい、いくつか予想がたつだろう。今すぐ追いつ払い、この倉庫周辺には責様しかいないようにしろ。少なくとも俺らは倉庫全体が見渡せる場所にいる。無事に取り引を成功させるためにも、被害者を出さないためにも、こちらからお願いしたい。頼んだ。以上だ」

俺は大きくため息をついて、目の前に腕を組んで仁王立ちをしている爺さんに言った。説明はできない。子供の命がかかっている。簡単に口にできることではないのだ。どうやってこの状態を切り抜けるか、必死で考えた。条件付だ。この事件のことを漏らしてはならないこと、倉庫の中に子供が閉じ込められ、爆破の恐れがあることを漏らしてはならないこと、この二つは必須だ。

「あの、本当にすみませんけど、この場から離れていただけですか。今ここに猫が迷い込んだみたいで、捜索願が提出されてるんです。お願いします、ここから離れてください。鍵だけ貸していただけませんか」

我ながらそんな虫のいい話は受け入れてもらえないと思った。しかし爺さんは少し考えると、鍵を渡してくれた。

「なんだか、信用し難い話だけど、警官が言うなら本当なのかな。まさかこの中に猫が入ったとは思えないんだが、そういうなら使ってくれればいい。ぜひその猫を助けてやってくれ。探し終わったらあそこの木箱の中に入れておいてくれればいいから。それじゃあね」
そういうと安い音のする原付バイクに乗ってどこかへ去っていった。携帯電話がまたしても鳴る。今はそれどころではないのだが。犯人からなら仕方がない。

「鍵は受け取ったか。我々がこの電話をかけているのは時間稼ぎで

はない。必要があつてかけているのだ。その鍵は本物なのか。本当にその鍵で開くのか、試してみたほうがいい」

一瞬、俺は戸惑った。ダミーだとも言うのか。もしそうだとすると、あの爺さんも犯人とぐるなのかもしれないということが容易に想像できる。

「ちよつと待つてください、電話は切らないで」

「なぜだ」

「逐次こちらから連絡できるようにしたいんです。それと、もうひとつ訊きたいことが。あの、さっきの爺さんとあなたたち犯人とはどういう関係があるんですか。この鍵がダミーだということを仄めかしているでしょう、あなたたち」

「……それはいえない。彼が我々のぐるだと思ふなら、そう思つていればいい。そして、この電話は切る。切らずにいたら、我々の気が揺らぎそうだ。じゃあ……失礼する」

「なんなんですか、あなたたちの企みはっ。何が目的でこんな誘拐事件おこしてるんですっ。こんなことを思いつくだけの脳味噌があるのに、なぜそれを活かさないっ。こんな無駄なことにその優秀な脳味噌を使うなっ」

俺は感情が抑えきれなくなつて、地面に崩れた。携帯電話を片手に怒鳴り散らし、片手を拳にして地面を叩いた。だが俺が怒鳴つた直後、携帯電話の向こうから俺と同じような怒鳴り声が聞こえてきた。

「うるせえっ、だまれっ。貴様に俺の気持ちなどわかるはずがないだろうが。貴様の娘と同じ年頃で、娘を亡くて……。俺の苦勞は誰にもわからない。分かつてたまるものか。こんなこととしていいはずがないことぐらい、俺だつて分かるんだよ、分かるさ。分かつてやってるんだよ……。あれ以来子供は産まれなかった。俺がどんなに苦勞したつて、女の体質がそうじゃなくちゃできないんだよ、わかるだろそれぐらい。だから、あいつを亡くしたときあの年頃の女の子が嫌いになつたんだ。なんでこいつはこんなに元気に生きてる

んだ、俺の娘の命はどうしてくれただって……」

犯人の声は震え、すすり泣く声が電話越しに聞こえてきた。そして、俺は思い当たるものがあつた。一昨年の今頃、俺の中学時代の同級が娘を事故で亡くしたんだっけか。そいつの名前は、確か

「……塩原か」

俺は恐る恐る聞いた。つい先ほど、浜町海岸で会つたばかりの、塩原が犯人なのかもしれない。

「やっと分かってくれたか。そうだよ、俺だよ……。畜生、刑事になつてまでこんなことをするなんて、俺もだめだな。ろくな人間になれてねえや。すまない、本当にすまなかつた。やっぱ、不良は不良のままなのかな」

俺は落胆した。まさか、塩原が犯人だとは思わなかつた。夢にも思わなかつた。公衆電話ではテレホンカードをつかっているのだろう。百円玉をいれているのなら、とづくに通話はきれているだろう。そして、俺は声をかけようとした。しかしそれは塩原の携帯電話の音でかき消された。

「おい、電話鳴ってるぞ。仲間からじゃないのか」

「電話は、切らないでくれ。もし仲間からだったら、その声を聞いてほしい。俺からも報告したいしな……。知らない番号だ……。いい、とりあえず出るから、電話はそのままにしてくれ」

「じゃあ、せめてスピーカーホンにしろ。そうしないと声が聞こえない。もしかしたらおまえの仲間かもしれないだろ」

「分かつた、ほら、押したよ。聞こえるだろ、コール音」

俺は頷いて携帯を耳に押し当てた。そこから聞こえてきた声は俺の度肝を抜くものだった。

（真犯人はおまえではない。佐久間由香里はこちらで預かっている。おまえのように生半可な誘拐ではない。覚悟しておいてもらおう。もう一度言う。おまえのような生半可な犯行でないことをここに報告する。場所は今、佐久間貴彦のいる栗木倉庫地帯だ。以上だ）

俺はその声を聞いて、塩原に怒鳴つた。本人が目の前にいれば、

胸倉をとつつかんで揺さぶっているだろう。

「てめえ、どういうことだよ、それ。全部おまえの仕業なんだろう？」

おい、何とか言えよ、塩原っ」

「なんだ、どういうことだ……。そちらの犯人に告ぐ。佐久間由香里は無事か。それは俺の本意ではない。どうなっている。答える、今すぐ答えるっ」

（騒ぐな。おまえが騒いだところで佐久間由香里は助からない。こちらもそれなりの恨みがあつて犯していることだ。塩原圭太、おまえに告ぐ。おまえの爆発物は嘘だということが判明した。たつた今だ。おまえの仲間もここにいる。因みに言うと、俺の爆発物は確かなものだ。爆発すれば、大型花火並みの威力はある。この倉庫ひとつぐらいは容易に爆破できると見ている。このことを警察、もしくはその周辺に漏らすな。情報漏洩じょうほうろうえいが見られた場合、即座に点火スイッチを押す。仲間も含め、人質を助けたいのならこのことを今すぐ佐久間貴彦に連絡し、倉庫の鍵を見つけ出せ。こちらから言わせてもらうが、その鍵はダミーだ。以上である）

「おい、おいつ。何だよ、おまえっ。何とか言いやがれ、この野郎っ」

「塩原っ、黙れっ。犯人の言うとおりだ。騒ぐな。どういう状況下にあるか、俺も少しずつ理解してきた。これはおまえの犯行ではないんだな？ それは信用してもいいんだな？ おまえは刑事だ。ちやんとしろ」

俺は何とか状況を読み込み、落ち着きを取り戻しつつあった。まるで、塩原に呼び出されたときの自分の声をきいているようだった。おそらく俺もこんなふうだったのだろう。それを小内はなだめたのだ。

「俺が爆発物を仕掛けたというのは、真っ赤な嘘だ。おまえを脅すために使った口実だ。だけど、今の相手は本物の爆発物を所持しているに違いない。正直に言わせてもらうが、俺もこの犯人については何も知らない。俺の仲間の声じゃない。それだけはわかる。ボイ

スチエンジャーも使わずに電話をしてきたから、それは確実だ。おまえ、今栗木倉庫地帯にいるんだろ？俺も今からそっちに向かう。すぐに着くから、ちゃんとそこで待っていてくれ。頼むぜ」

「すぐ来いよ、昔からおまえはそう言っただけで来ない。刑事になって少しは人格が変わったのかもしれないし、それを信用する。今すぐこっちに来い」

そう言う俺は電話を切った。身体全身の力が抜けた気がした。広大な倉庫を目の前にして、俺は地面に頂垂れていた。無事なら、塩原の仲間も含め、全員が無事ならそれでいい。一番無事でいてほしいのは娘だ。果たして、俺はヒーローになれるのか。これほどの大事を警官二人で解決することができるのか心配になり、再び弱音を吐きそうになった。だが、かつこいいところをみせなければならぬ。娘にそういわれたではないか。「かつこいいところみせてね」と。ここで弱音を吐くわけにはいかない。俺は自分の頬を引つ叩いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2152ba/>

憧れのヒーロー

2012年1月6日19時49分発行